

## 汚れた桜

自宅前の桜も咲きはじめた。「コロナ・ショック」もあり、今年の桜の開花は、どうも率直に喜べない。写真の本を一気に読んだ。そのタイトル「汚れた桜」が安倍政権を象徴している。「おわりに」だけでも抜粋して紹介したい。

「まるで『脱法内閣』じゃないか」—私たち取材班が「桜を見る会」疑惑について取材を進める中で、浮かび上がってきた言葉だ。

安倍晋三首相は政府の公的行事である桜を見る会を私物化し、多くの後援会関係者を接待していた。同じことを首相がポケットマネーでやれば、公職選挙法に抵触する可能性が高い。公選法もまさか時の首相が税金を使って数百人規模にのぼる自身の後援会関係者をもてなす、などということは想定していなかったのだろう。これは「脱法行為」に近いのではないか。同じように、前夜祭を巡って首相は「安倍事務所職員が集金を代行しただけで、後援会にお金の出入りがないので、政治資金収支報告書に記載する必要はない」と繰り返している。政治活動の公明と公正を確保する法の目的から逸脱しているのは明らかだ。こちらも、立法時にパーティそのものを「なかったこと」にする政治家が現れることなど想定されていなかっただろう。

そして預託商法で何千人もの被害者を出したとされるジャパンライフの元会長や反社会的勢力とされる人たちも招待されたのではないかという疑惑。政府は招待者名簿が「保存期間1年未満」の文書だったので自分たちのルールに従い「遅滞なく廃棄した」という。しかし、実は国会議員が資料請求した1時間後に名簿を廃棄し、残っていたバックアップデータも隠していた。仮に合法だったとしても、公文書の適正な管理を図り、「現在および将来の国民に説明する」という公文書管理法の目的に反しているのは明らかだ。そもそも立法府が行政府をチェックできず、三権分立が機能しないではないか。

桜を見る会を巡って次々に噴き出してきた問題を見るにつけ、この政権は違法すれすれの「脱法行為」を繰り返して、国家そのものを私物化しつつあるのではないかと危惧している。それは、今回が初めてではない。森友学園問題では安倍首相の支援者だった籠池泰典氏が建てようとしていた小学校の用地として、国有地が大幅に値下げされた。首相が「腹心の友」と呼んではばからない加計孝太郎氏が理事長を務める加計学園は、愛媛県に岡山理科大獣医学部を開設する時に有利に扱われた疑いがある。しかしこの政権は、真相が記録されているはずの公文書を「もう廃棄した」などと言ってなかったことにする。記録が出てくれば「記憶はない」と言い逃れ、財務省は記録を改ざんしてまで疑惑を隠蔽しようとした。

長い歴史の中で積み重ねられてきたルールが、安倍首相とその周辺の都合のためだけに次々に骨抜きにされてきたのが、この政権で起きていることではないだろうか。

(2020年3月25日)

